

幸いにしてかなりの好評を得た「所見からせまる脳 MRI」の初版が2001年10月に世に出てしばらくすると、早くも改訂版の話が編者やその周囲で上がり始めた。改訂の基本的な姿勢とはさらなる内容の充実にあったが、具体的には初版以後の新たな文献や知見をもとに、鑑別診断として挙げた疾患やそれらの解説をさらに拡充させることであった。症例の画像をより良質あるいは適切なものに改めたものも数多い。また、初版にはなかった「錐体路の異常」、「脳梁の異常」、「両側小脳の異常」といった新たな項目や、脳腫瘍に関してはWHO分類2007に基づく記載を追加した。加えて主要な所見からのアプローチ以外に、冒頭の「頭部MRIにおける読影法」など新たな内容とスタイルの章も加えてある。さらに、初版では章によってはレベルに若干バラつきがあった点を、新たに大場先生と下野先生に加わって頂き、編者4名によるチェックで極力レベルアップを計ったつもりである。

当初の予定よりも完成までにいささか時間はかかってしまったが、おおむね編者が意図していたおりの内容や体裁のものにすることができた。本書は、画像診断医のみならず脳のMRIに関わる幅広い読者の方々に、日常診療の強力な手引書として初版にも増して役立てて頂けるものと考えている。編者の増強により他方では、作業の過程で「船頭多くして船山に登る」のことわざに近い状況になりかかったこともあったが、ここまでうまくまとめ上げ本書を無事発刊にまで導いて下さった秀潤社の原田顕子さんにはこの場をお借りして厚くお礼を申し上げたい。

土屋 一洋

画像の検索は難しい。画像からある程度のキーワードが得られれば検索が可能となり、専門でなくとも診断の目安が見つかるかと思えます。それにより、まずは患者さんへのある程度の説明が可能となり、さらに専門医の読影を仰いだり、紹介先を検討したりする目安となるでしょう。

この一風変わったスタイルの本は、画像から「絵合わせ」でなんらかの疾患名の検索が可能となることを目的として、2001年に出版したものです。このたび、編者に日本の神経放射線分野で博覧強記の若手といえばこの2人という下野・大場両先生に加わっていただき、なんとか改訂することができました。この本は両刃の剣であり、画像の奥深さや怖さを知らない方が絵合わせだけで診断できるとしてしまうのは不本意です。本書が目指すのはあくまで、専門家の備忘録、非専門家の手がかりです。自分が見たようで見ていないスライスや画像の隅が実は結構あること、よく似た別の疾患が実はたくさんあることを知った上で使っていただければ幸いです。画像でも日常生活と同様に、双子の兄弟姉妹や他人の空似（同じ画像で別の疾患）、羊の皮をかぶった狼（良性疾患に似た悪性疾患）などがたくさんあると思います。

今回追加すべきリストとして多くの疾患が挙がりましたが、ページ数の都合上すべての鑑別はリストに載せられませんでした。この分野を専門とする方は、神経放射線学会などの専門の学会で最新の情報を更新していただきたく存じます。この本がMRIを受ける患者さんに役に立つことを信じつつ、神経放射線を志す医師が増えるきっかけとなれば幸いです。

青木 茂樹

青木先生、土屋先生が創刊されたこの神経放射線診断の名著である初版は、編者2人は邪道と謙遜されたが、所見から鑑別にせまる手法は画像診断の王道であり、多くの読者を獲得してベストセラーとなった。新しい疾患や知見が毎月のように増え続ける業界で、最初から疾患や画像まで熟知している人は一握り以下であろうし、そっくりな画像の疾患を探して診断名に至るのは、放射線科医でなくても誰にとっても常套手段と思われる。誰でも Google や PubMed, OMIMなどを駆使して、疾患を検索した経験があると思うが、本書は現時点では、これら検索サイトを凌駕していると思う。少なくとも検索する疾患名を見つけるのにはとても役立つと思う。

今回、改訂にあたり下野太郎先生とともに編集に加わった。所見分類もきめ細かくなり、疾患数も膨大な数になっている。前回、分担執筆した折にも、出版直後から「この疾患が抜けている」などのアドバイス、お叱りを多数頂いた。今回の私自身の分担項目だけでも、毎週のように疾患が増えていき、うんざりするくらいの疾患リストとなってしまった。膨れあがった疾患数に圧倒され收拾がつかなくなっていた私を、クールな頭脳で救ってくれた下野先生と原田顕子編集長に深謝いたします。なかなか脱稿することができず、改訂版発行が大幅に遅れた責任の多くは私にあり、この場を借りて関係各位にお詫びいたします。最後に、この本が臨床に携わる先生方や患者様のお役に立つことを祈願いたします。

大場 洋

この本は、私自身がこのような本があれば絶対買うのにと思っていた本です。青木茂樹先生のアイデアで初版が企画され土屋一洋先生と共にこの世に出されたことは、神経放射線学領域のみならず画像診断学において世界に類を見ない画期的なことだと感じていました。今回は、このような本の改訂を手伝うことができ大変光栄に思っています。

この本はいわゆる「絵合わせ」の教科書で、日常臨床においてすぐさま役立つこと間違いなしです。ただ、画像診断学において「絵合わせ」はほんのさわりにしかすぎません。実際、この本を開けてみると、各病態を画像パターンのみで診断するのがいかに難しいかということに気付かれることでしょう。人によっては、言葉から抱くイメージと実際画像との間にかかなりのずれもあるのではと推察します。画像を言葉やパターンに置き換えるという作業は、概して無理な部分があるものです。この限界を考慮して、間口が広くなるようにとの考えで編集に携わらせていただきました。

何らかの法則を見いだしつつ、考えながら画像診断をするという奥深さや楽しさを、この本を通じて再認識していただければとても嬉しく思います。各執筆者の力作と秀潤社の原田顕子さんのご尽力により、初版より数倍パワーアップしたのではと密かに自負しています。この本を作るのに協力していただいた方々と、この本を手にとっていただいた貴方に心から御礼を申し上げます。

下野 太郎

序 (初版)

この本は通常スタイルの教科書ではない。体裁については画期的な本といってもいい。画像診断の王道を行く教科書ではないが、画像が読めない人にも、読める人にも役に立つ本と考えている。

見ていただければすぐわかるように、脳の画像診断の key findings でそれぞれに考えられる疾患を列挙した、画像から疾患名を挙げるための本である。通常の教科書では、腫瘍、血管障害、感染、脱髄といった疾患の分類に従い記載するわけだが、この本ではそういった分け方は極力排除してある。所見としては日常遭遇するものや、鑑別診断に重要なものはほとんど網羅されている。とにかく、何か異常を見つけたら、この本を見れば何がしかの病名が挙げられるようになっている。さらに、文章による所見の解説より、画像をできるだけ多く載せるようにしたので、「絵合わせ」で病名が挙がってしまう。したがって画像診断の邪道を行く本ともいってよい。とりあえず病名さえいくつか出てくれば、IT時代の今では、すぐにも詳しい情報を手に入れることができる。芋づる式に正しい疾患に行き着くこともあるであろう。とはいえ1つの病名も挙がらなければ診断を進めるスタートには立てない。日本で数千台の装置が稼動している現在、緊急でMRIが“撮れてしまう”病院も多く、脳のMRIが得意でないものがいやおうなしにそれにかかわらねばならない状況がある。また細分化が進んでいるので、脳を専門とする各科の臨床医でも、分野が僅かでも違うと立ち往生してしまう場合もあるだろう。とりあえず、「絵合わせ」が早くできて簡単、かつ患者さんにも役立つならそれもよいのではないか。(ただし、画像診断を本業とする者は、そこに終わってはならないので、従来の教科書を追ってきちんと参照して頂きたい。)

よって、この本は以下の方々に関与すると考えられる：腫瘍・血管障害以外も“見ざるを得ない”脳外科医(変性・代謝疾患は避けたいが、まわりに神経内科医や放射線科医がいない)、画像に興味がなくとも見ざるを得ない神経内科医、神経を専門とする小児科医、一般の放射線科医・放射線技師、脳に興味のある医学生・パラメディカル。そして、以下の場合にも役立つであろう：脳の画像を中心としたカンファランス、放射線科の診断クイズ、そして、神経放射線科医の頭の体操(ボケ防止策)。また、ある程度画像から疾患が挙げられるレベルの放射線科医には、思い込みによる誤診を避けるのにも役立つと思う。病院には症例の偏りがあり、ある施設では間違いなく特定の疾患の所見であっても、病院を移ると他の疾患を考えねばならなくなる。しかし、なかなかすぐには対応できないものである。そのような場合に、本書で掲げたリストを一覧すれば思い込みによる誤診に陥らず、たとえ頭の隅にでも他の可能性を浮かべることができると思う。

編者の1人の青木が、このような本を書いてみたいと思い立って、鑑別診断のリストを作り始めたのは数年前である。かねてから何名かの先生に、所見から疾患名が引ける本があればいいと言われていた。それが発端である。その後1人では遅々として進まなかったが、共同編者に土屋が加わってから段取りが進んだ。通常とはかなり趣を異にした依頼を見事にこなしてくださった著者の先生方、そして秀潤社の原田さんのおかげで予期した以上の本に仕上がったと思う。心から御礼を申し上げたい。

2001年9月

土屋 一洋
青木 茂樹